# あなたのいる彼方へ——目次

一、……7
二、……37
三、……53
四、……81
五、……108
六、……129
七、……175
八、……199
九、……223
十、……251
十一、……294
十二、……320

表紙、カバー、帯／写真・装丁　井上勝夫

# あなたのいる彼方(かなた)へ

物語の時代設定は１９９０年代前半です。

世界に　たった一つの巡り逢い
そんなものが　あるのだとしたら
たぶんそれは　あなたとのこと
今は二人　指の届く距離ではなくても
その声に導かれるままに
その面影に誘われるままに
私はあなたのための　旅人となりたい
遙かな道を歩き続け
ついには地の尽きるまで来たのなら
私は泳いで行く
銀河の輝く下を　黒い海の果てまで
あなたのいる　彼方へと向かって

ふーすけに

一年半を掛けた日本一周の野宿旅の中で、沖縄の西表島（いりおもてじま）には二カ月ほど滞在した。

テントを張ったのは、南風見田（はえみだ）の浜という、南側の海に面した砂浜。日本中から集まってくる旅人、ちょっと古い言い方をすれば風来坊（ふうらいぼう）たちにとっての、まさに楽園と呼ばれている場所である。

キャンプ場ではなく、あくまでもただの砂浜だから、炊事場もトイレもシャワーもない。水は砂浜を流れている川から汲んだし、トイレはジャングルの茂み。風呂の代わりに、海で泳ぐか川での水浴び。食料の買い出しは、港のある集落の商店まで、オートバイで走って行った。

このような日々は、しかし決して不自由な毎日ではなかった。いや、不便であったかもしれないが、素晴らしく自由な毎日であった。何かをしなければならないということはまるでなく、何をしても、何をしなくても、それは完全に自分の心のままだったからだ。

僕は島のあちこちや、ジャングルの中まで出掛けていって、人一倍行動をしたと思う。その一方で、腕時計を外し、靴も履かず、朝から晩まで心地よい木陰のハンモックに揺られながら、ただ目の前の海を眺めているだけのこともあった。行動する日も、積極的に何もしない日も、どちらも貴重な人生の一日だった。

ある日、僕はテントを張った場所から海沿いに、島の西側に向かって歩いていった。左手に海を見て、右手にはジャングルの山を見て、砂浜や、岩場や、岩混じりの砂浜を進んでいく。海はきらめいて、ジャングルは鬱蒼とし、延々と続く海岸には人影もない。

だがそんな風景の中にいくつか、人のいた形跡があった。張りっ放しのままで捨ててあるテントや、シートや石組で区画された小さな居住地跡、あるいは貧しい小屋の残骸とか、錆びたドラム罐風呂など。この地に楽園を思い描き、半ば世を捨ててやってきた人間たちの儚い夢の残滓が、木々に埋もれて、ひっそりと存在していた。

けれども太陽はあまりにも眩しくて、僕を感傷に浸らせたりはしなかった。むしろこれらの発見で探検気分がそそられて、いっそうこの散策が素敵なものになっただけである。僕はますます気分を良くして歩いた。

そのうちに海岸からは、自然物以外のものが消えた。海も、山も、砂も、岩も、空も、完全に自然そのものの姿だった。僕は汚されることのない空気を存分に吸い込んだ。人の手の加わっていない風景を存分に見つめ、雑音のない風の声に存分に耳を傾けた。

やがて、幾つ目かの長い砂浜が終わりかけ、続く海岸はまた岩場に変わろうとする頃、僕の耳はある音を捕えた。涼しげな、風鈴に似た音。右手のジャングルのほうからである。

聞こえたのは一度きり。しかもとても小さかったので、ひょっとしたら空耳だったのかもしれない。それでも僕は、音がしたほうへと歩く向きを変えた。

ジャングルの手前は、砂浜が一段高くなって、ちょっとした草地になっていた。わずかな踏み

跡が木々の中へと伸びている。たどっていくと、うっすらと木洩れ陽の差す空間には、まだ比較的新しいテントがあった。もちろん、人が使っている状態でないことは一目で分かった。出入口の裾に、落ち葉が溜まっていたからだ。

視線を回すと、自分をここへ導いた音の正体を見つけた。テントの手前の木に、珊瑚の欠片と細枝と蔓とで出来たモビール状の風鈴が、ややバランスを崩してぶら下がっていた。

白い珊瑚は少しも揺れていなかった。風受けがないからだ。僕は手を伸ばして、細枝の端を指でつついた。澄んだ音色が、薄暗い木立ちの中で微かに響く。こればかりの音が波打ち際まで届いたとはとても信じられなくて、僕は再びあたりを見回した。あるのは今揺らした手作りの風鈴と、緑色のテントだけだった。

不思議には感じたものの、普通ならば、そこで立ち去っただろう。実際に僕はテントに背を向けて、海辺に戻ろうとした。けれど何かが、僕を引き留めた。振り返って、テントの前まで戻ってしゃがんだ。一瞬のためらいのあとに、ファスナーを引き上げて出入口を開けた。

脱ぎ捨てられたままのような寝袋以外は、テントの中はきれいに片づけられていた。四人用テントの中に、二人分の荷物。二つの寝袋のうち一つは、きちんと袋に入れてある。僕は多少の罪悪感にかられながらも、興味をもってテントの中の観察を続けた。

すると、畳んで置いてあるもう一つのテントの上に、封筒に入った手紙の束を見つけた。日本の各地から、同じ一人の女性によって、恐らくこのテントの持ち主である男性に差し出されたものが数通。男性から日本の各地へ、その女性に宛て、局留で出されたものが数通。それらと一緒

に、封筒に入っていない便箋も数枚あり、僕はその文面を読んだ。

衝撃を受けた。ひどく大きな衝撃だ。このテントの持ち主たちがたどった運命を、まざまざと想像できる気がした。便箋の終わりの一枚をめくると、僕の心臓はますます激しく鼓動を打った。そこには丁寧な鉛筆画で、女性の顔が描いてあったのだ。わずかに微笑み、わずかに悲しげな表情をした、綺麗な女性。手紙の女性の似顔絵に違いなかった。

南風見田の浜に戻ってからも、僕はそのテントの持ち主たちのことが気になって仕方がなかった。彼らの運命を考えると、いても立ってもいられない気分にさえなった。とくに鉛筆画の女性の顔を見てしまったことが、そこまでの感情を持たせたのだと思う。

翌日もう一度、彼らのテントの場所に行ってみた。最初に僕がしたのは、あの風鈴に風受けをつけることだった。近くの木から大きめの葉を何枚か千切って、珊瑚の端に細い枯草で結びつけたのだ。崩れていたバランスも、蔓の結び目の位置をずらして直した。

期待を裏切って、風鈴は鳴らなかった。そよ風が木立ちの間を吹き渡っても、風鈴はかすかに揺れるだけで、珊瑚どうしがぶつからない。しばらく様子を観察したあと、僕はあきらめて、テントの出入口を開けた。

封筒の束を手に取った。再びここに来たのは、これを読むためだ。テントの持ち主たちにどんな過去があったのか、手紙が教えてくれるかもしれない。あるいは消えた二人の行方に、何か手掛かりを与えてくれるかもしれない。そう思ったのだ。

木々の隙間から見える海のほうに体を向けて、テントの中に腰を下ろした。心を落ち着かせて、

消印の一番古い封筒から便箋を取り出した。

女性の手紙と男性の手紙とが交互に、僕に彼らのことを語っていった。新たな封筒を開ける度に、彼らの旅が展開していった。夢中になって文面を読んだ。他人の手紙を読むという行動への罪悪感など、いつの間にかすっかりなくなっていたと言っていい。彼らの旅は面白かった。実に奔放で、痛快で、ロマンと魅力にあふれていた。

そして、彼らの旅を知ることは、彼ら自身を理解するのと同じだった。彼らの人間性もまた、僕を引きつけた。封筒を全て開けたとき、確かに僕の胸には、同じ旅人としての彼らへの単なる親近感以上の、友情や愛情に近い気持ちが生まれていたのだ。

もっとも、謎や疑問は残った。昨日読んだ衝撃的な便箋の文面が予測させる結末に、手紙は確証を与えてくれたわけではない。あるいは手紙に書かれた以上の過去や履歴、心理や行動については、想像する以外の術はなかった。

封筒の束を元に戻して、女性の似顔絵が描かれた便箋を手にとった。悲しげな微笑を浮かべる彼女を見つめながら、僕は考えた。彼らの行方、彼らの旅の始まり、彼らの人生を。

やがて、彼らの旅と、自分の旅とが重なっていき、ぼんやりと筋書きが見えてきた頃、不意に頭上から澄んだ音色が聞こえてきた。それまでの数時間、一度も鳴ることがなかったあの風鈴が、風向きでも変わったのだろうか、鳴り続け出したのだ。

その音色は、何かを語りかけるかのように僕の心へと入ってきた。まるで似顔絵の女性の囁き声でもあるかのように、謎も秘密も溶かして消し、僕の中に、一つの物語を作り上げていった。

# 一、

リサ、元気か？　俺は今日、沖縄の本島に着いたぞ。いきなり真夏に逆戻りしてしまったみたいだ。フェリーから降りた途端に、もわっと熱い空気が体を取り巻いて、思わずにやりとしちゃったよ。じわりと汗が出てくるんだ。そっちとは全然違うよな。

そう、やっぱり沖縄は異国だよ。南の島。太陽がすごく元気だ。空の青さも違って見える。なんだかこう、脳天気な自由さを保証してくれているみたいな青さ。公園に植えてあるヤシやハイビスカスなんかも、「ここは南の島よ」って囁いているみたいだ。

ああ、俺はここに戻ってきたんだなあって感じだよ。おまえも知ってる通り、俺の日本一周の時以来だから六年ぶりなんだけど、時間を飛び越して、あの時そのままの続きでここに立っているみたいだ。なんだか沖縄も俺のことを憶えててくれて、優しく迎えてくれているように感じる。

本当に、また旅に出て良かったと思っているよ。沖縄に来るまでの南下の旅も、毎日がなんて充実していたことだろう。やっぱり俺の本質は、こういった旅の中にあるんだと確信できる思いがしたよ。まあとにかく今は、沖縄までやってきたことがとてもうれしい。石垣島に行くフェリーは明後日だから、それまでは本島をぐるりと

回ってみようと思ってる。面白いところがあったら、そのまた次のフェリーで行ってもいいけど、早く石垣島か、西表島に行きたいよ。あっちはもっと暑いんだろうなあ。あー、早く泳ぎたい！　熱帯魚どもが俺を待ってるぞ。

米原キャンプ場や、南風見田には、どんなやつがいるかな？　俺の知ってる旅人もいるかな？　タイチョウやドラがいたら楽しいんだけど。

だけどね、リサ。本当は、おまえと一緒に来たかったよ。もう一度考えてくれないか。おまえは今、毎日が楽しいか？　今の生活を一人で続けてて、幸せか？

俺が一人で旅に出たことは、悪いと思ってる。おまえと離れていることも寂しいよ。でも旅に出たことは、全然後悔していないぞ。これが俺の生き方だと思っている。遊ぶみたいな生き方だけど、それがどうして間違ってるって言える？　こうして旅をしていると、俺はすごく「生きている」と感じられるんだ。本当の自分になれる。人生は実に楽しくて、素晴らしいものだと思えるんだ。

だからおまえにも、こういう気持ちを感じてほしい。俺はおまえの人生を、誰よりも素晴らしいものにしたいと、真剣に望んでいるんだ。

沖縄に来てくれよ。一緒にサンゴの海で泳いだり、ジャングルを探検したり、木陰のハンモックに揺られたり、七色の夕焼けを眺めたりしよう。

おまえと一緒の時を過ごしたい。

また手紙を出すよ。石垣島か、西表島か決めたら、絵ハガキでも出すからさ。

その時までに決心しておいてくれ。俺と旅をするか、今の生活を一人でも続けるかを。

九月二十九日　　圭

十月に入ると、北海道ではもう、冬を意識しないわけにはいかない。

特に元々が北海道の生まれでない者にとっては、夏が終われば、秋を飛び越していきなり冬がやってくるような感覚がするものだ。鮮やかで、暖かで、あらゆる生命が輝いていた夏が、あるとき不意に去っていく。代わりに冬が、そっと忍び寄ってくるのだ。

空が灰色に見えるときなどは、雪が降ってくるんじゃないかと思ってしまう。もちろんまだそんなことはないが、テレビではとっくに大雪山初冠雪のニュースを流している。山のほうでは紅葉の時期も終わって、すでに冬の着替えを始めているのだ。冬は空から降りてきて、高いところから順番に地面を凍えさせていく。

理沙が初めて北海道に来たときは、冬の真っ直中だった。もっとも北海道の人間に言わせれば、それでもまだ冬の初めだったのかもしれない。十一月の、最後の週。アルバイトで、ニセコひらふスキー場にやってきた。すでに天然雪がゲレンデを覆い、ほとんどのコースで滑走が可能になっていた。周りの道路は凍結したり、雪が轍を作っていたりして、全くの別世界にやってきた気持ちがしたものだ。

雪が積もるなんて、理沙が生まれて育った神奈川では、一年に二度、見られるか見られないか

である。それもほんのうっすらとしか積もらないから、すぐに泥とのごちゃ混ぜになった汚らしい地面になる。大袈裟な車はチェーンをつけてジャリジャリ言わせ、女たちは足が滑る度に奇声を上げ、男たちは下ばかり見てうなだれて歩く。雪は誰にとっても明らかに異物で、迷惑で、うるさく、汚い存在だった。たった一人自分だけが、子供のように、ひっそりと心の中で浮かれていた。理沙は雪が好きだった。

ニセコのスキー場でアルバイトを始めたとき、理沙は特には孤独感を持たなかった。見知らぬ人間たちの中に、遠いところから一人で入ってきたわけであるが、なんとなく、住み慣れた街よりも、自分の家よりも、居心地が良かった。なぜならここには雪が嫌いな人間など、誰一人いないと信じていたから。

ところが驚くべきことに、スキー場で働いていても、雪が嫌いな人間がけっこういた。スキーもスノーボードもいっさいやらないという者たちさえいる。麓の倶知安町から通いで来ているパートのおばさん連中ならば話も分かるが、自分の同年代前後の人間がそうだと、もうほとんど理解を超えていた。それならどうしてわざわざ、こんな不便で、寒くて、日給も安いバイトを選んだのかと思うのである。寝るところと、三食がついているから？

当然スキーが大好きという連中もいた。まさにスキーをするためにバイトに来ている者たち。就業時間以外は、とにかく滑っている人間。大半がそうである。

理沙もスキーが好きだった。好きでなければこんなバイトを選ぶわけがない。でもものすごく好きというほどではないし、どちらかと言えばスキーよりも雪が好きだ。それは単に憧れだと言

ってもいい。雪を被った山。白い平原。雪の中を流れる川。凍った湖。そういう風景が、とにかく好きなのだ。

短大時代、理沙はワンダーフォーゲル部に入っていた同性の友人と二人で、冬の北八ヶ岳に登ったことがある。理沙自身は写真部だったから、まともな山登りというものをしたことがなかったのだが、頂上の近くまではロープウェイで行けたし、一部を除けば行程にもそれほどの登りや下だりはなかった。むしろ登山というより、ただ重い荷物を持っての雪の高原の散歩という感じだったが、それで理沙は充分に満足した。天候にも恵まれ、空は青を通り越して紺色。見渡す世界はどこまでも真っ白で、眩しく、清らかに、荘厳さに満ちて広がっていた。テントを出た朝、霧氷で森の樹も白くなっているのを見たとき、自分はなんて幸せなのだろうと感じたものだ。それから自分が意外と、寒さに平気なことも知った。

泊まり掛けで雪の中に出掛けていったことはそれ一度きりだったが、ニセコに来たとき、またそれをやってみようと計画していた。でも初めはスキーばかりした。短大時代によく行った信州のスキー場と違って、ゲレンデでもかなり自然の雰囲気が味わえたからだ。

積雪が五メートルを超えると言われるニセコだが、実際の積雪量がそれほどではない時期は、一部、木が埋まらないゲレンデもあるので、人が少ないときなどは本当に自然の中に入っている雰囲気がしたものだ。理沙はゲレンデを滑走するよりもむしろ、そんな林の中で、一人でぼんやりしている時間のほうが好きだった。

アルバイトを初めて三週間目、前夜に降った雪がうっすらとゲレンデの表面を覆っている晴れ

た日、理沙は朝からスキーを始めた。休みの日は前もってある程度自分で決められる。月に六日が基本で、暇な期間の平日ならば三連休を取ることだって可能だ。この日は一日だけの休みだったが、こんな絶好の日に休みが重なったことを幸運に思った。まだ誰も滑走の跡をつけていない頂上に近い裸木の林のゲレンデの中に、理沙はロープを潜って入っていった。

さらさらの新雪の上に、自分だけのシュプールをつけていくというのは、うっとりするような快感があるものだ。木が密に生えた傾斜地でも、広がった枝に突っ込んだりするほど下手でもなかったし、逆に自由自在に滑れるというほどの腕でもなかったが、楽しむことは充分にできた。

裸の木々の合間を滑り降り、平らな高原状になった見通しの良い林の中に来ると、理沙はいつもの通り、お気に入りの倒木の上に腰を下ろした。もともと地面から離れて倒れている幹が、今はちょうど良い高さに雪面から浮いている。

自分が滑ってきたほうに背を向けて座ると、左手にはメインのゲレンデが、一つ谷を越したところに見える。平日の早い時間なので、滑っている人間の姿は少ない。ところどころに設置されたスピーカーから流れてくる音楽が、ここにもやはり聞こえてくる。音楽なんか流さなければいいのに、といつも思う。あれはどれくらいの人が喜んでいるのかなあ。

せっかくの自然の中にいるような気分が、派手な音楽のために壊されてしまう。そろそろ本当にゲレンデから離れて、人の手の加わっていない自然の中に行ってもいい頃かなと考えた。しんという音が聞こえてくるほどの、静寂の自然の中。ただ、自分には山の経験も知識もそれほど無い。雪の中ならばなおさらだ。

あるいは手始めに、ちょいとゲレンデを離れる程度でもいいのだが、この広大なエリアの中、いったいどこから始めたものか。下手をして遭難、なんてことになったら、恥ずかしいもんね。恥ずかしいよりも、もっと大変なことか。

理沙は立ち上がって、ぐるりと自分の周りに広がる景色を眺めてみた。正面には富士山にそっくりな羊蹄山があるのだが、今はそこだけガスが掛かってしまって見えない。右手は林混じりの雪原で、遠いところに隣のニセコ東山スキー場のリフトが見えている。後方は急ではあるが滑らかな稜線を持ったアンヌプリと、自分が滑り降りてきたその斜面。

――ニセコ。北海道。雪の国。山の中。

自分がそんな場所にいることが不思議な気がする。街で生まれて育って暮らして、ただ漠然と雪の世界に憧れていただけの自分が、今こうして実際に自然に囲まれた場所にいる。人間の吐息よりも、自然の息吹がより濃い環境の中に生活している。

視線を下に向けて、自分自身の存在を確認してみた。ワインレッドのスキー板を履いて、雪の上に立っている自分。黄と黒と灰色の使ってあるスキーウェアを着て、冬の太陽の光を浴びている自分。

短期大学を卒業して最初に入った会社を二年で辞め、次に入った会社があっけなく倒産してしまってから、アルバイトで生活していた。ちゃんとまた就職をしようと考えたこともあったが、自分にとって何が本当に良い仕事なのかが分からなくなっていたのだ。まともな社会人として生きていたのは三年に満たない期間。いわゆるフリーターとしての期間が一年弱。

何かの目標を持って働くことが、苦手な人間。自分はそういう種類であることを分かっている。一生懸命に仕事をするということに、なにか照れがあるのだ。仕事に生き甲斐を持っていますなんて、たぶん一生言えないことではないか。そんな気もする。もっと大切な何かが、人には、自分にはあるはずだ。

大方の人間と違って、自分は日常の生活をしながらも、どこか幻想を追いかけているような部分がある。生活が人間にとってそれほど大切なことだとは思わずに、むしろ人間は生活から解放されるべきであると考えている。

だからといって働くという行為に反感を持っているわけでは決してないし、生活をせずに人が生きていけると真剣に思うほど現実離れもしていない。つまり、どこか自分は中途半端で、どこか無気力なところがあるのだ。がむしゃらに生きたなんてことが、今までに一度だってあっただろうか。

ただ、こうして今、雪の世界の中に立っていると、自分が間違った方向には生きてこなかったことが分かる。ひどく後悔をするなんてことも経験しなかったし、ことさら悪い思い出といったものもない。今の状況に疑い無く満足しているわけでもないが、一歩踏み出せば、何か全く新しい人生が、眩しい光とともに開けていくような気持ちがする。

それともこういうところが、自分の癖である幻想なのかも。現実を見つめていない証拠なのかも。私はただのアルバイトの人間で、スキーのシーズンが終われば、おそらく地元に帰って、特に変わっているわけでもない生活を続けるんだ。

自分はどんな人間なのだろうと考えた。やっぱり少々変わった女なのかもしれない。こんなところに、一人で突っ立っているくらいだから。一人でこんなに遠いところまでバイトに来て、少しも寂しいなんて感じない人間なのだから。

理沙は頭の上に差していたレイバンのサングラスを外して、そのレンズを自分に向けてみた。わずかな膨らみを持った黒いレンズ面に、少し膨張した顔が半透明に映る。サングラスを顔に近づけると、顔はどんどん膨らんでいき、鼻と頬の大きな、垂れ目の間抜け面に変わった。じっと見つめてから、にいっと笑ってみる。

《可愛い》

ギャグマンガの登場人物の顔のようになった自分を見て、理沙は少し笑った。それから今度は目をレンズの中心に持っていくと、垂れ目はたちまち変形して、ややきつい感じの上がり目になった。ちょっと顎を引くと、ますますきつい目になる。

《ほんと、猫の目みたい》

凸レンズ効果でディフォルメされているとは言え、確かに自分は猫目だと思った。もちろん実物の猫の目が、一般に人に対して言われるような猫目などではないことは知っている。だが人が『猫目』と言うときに、誰もが思い描く形の目、そのままを自分の目はしていると思えた。

《猫目のリサ》

昔からよくそう言われたものだ。小学生の時はからかわれる意味で男子から言われ、高校や短大の時には友好の意を持って友達から言われた。

もっとも社会人になってからは、誰からもそんなことは言われなくなった。代わりに、「綺麗だね」とか「美人ね」と言われることはあるのだけれど、具体的にどう綺麗だとか美人だとか教えてくれる人は誰もいないから、たぶん単なるお世辞なのだろうと思う。そして猫目だと言われなくなった分、自分は孤独になったのだと思える。つまり短大を卒業して以来、自分には全然友達も彼氏もいなかったというわけだ。

《私は猫だから、一人でも平気なんだ》

心の中で言ったあと、にやりと笑った。サングラスの位置を変えてその口元を映してみると、艶(つや)のある唇の端がきゅっと上がって、機嫌のいいときの猫みたいな口の形を作っていた。サングラスの蔓(つる)を髪に差して頭に戻しながら、ここに来て、自分は前よりも笑うようになったと思った。

確かに、スキー場の仕事は今までのどのアルバイトより、就職した二つの会社の仕事より、ずっと面白かった。受け持ちはインフォメーションだ。言わば花形。放送を掛けたり、アナウンスをしたり、カウンターにやってくるお客さんに案内をしたりの仕事。自分でも意外なことだったが、そうやって人前に出たり、人と接したりする仕事が楽しく感じられた。

それに、同じインフォメーションの仲間ともけっこう気が合った。みな三年以上連続してここでバイトをしている女の子たちで、理沙だけが新人であったわけだが、先輩後輩ではなくて、友達のようにやっていけた。みな明るさと気楽さを持っているのが良かった。

その中でも一番仲良くなれそうだったのが、一つ年上の水野美里(みずのみさと)である。バイトの仲間からは『ミリ』というあだなで呼ばれており、インフォメーションの中ではただ一人、肩までの長さし

かないショートカットに近い髪型をしていた。

美里はいろいろと親切にしてくれた。職場や寮での規則以外の慣例や慣習のことはもちろん、仕事のこつとか、上手なさぼり方とか、嫌な客の対処の仕方とか、あるいはスキー場周辺のおいしい食べ物屋の場所とか、周囲に点在する温泉のこととか、思いつくことをぽんぽん教えてくれるのだ。寮での食事を一緒にしたり、ナイタースキーに誘ってくれることもあった。親切にしてくれるというよりは、友達になろうとしてくれていると言ったほうがいいかもしれない。

彼女が言うには、北海道は冬よりも夏のほうが断然面白いらしい。冬は一箇所に閉じ込められてしまうが、夏は自分の行きたいところどこにでも行けるからだと言う。それに冬は景色が白一色になってつまらないが、夏はありとあらゆる色があふれているのだと説明した。

理沙は冬が――雪の景色が、白一色だとは思わなかったし、自分が閉じ込められている感覚もなかったが、べつに反論したい気持ちは起こらなかった。美里は冬が悪いと言っているわけではなく、夏がそれ以上だと言っているだけなのだから。

ほとんどうなずく一方の理沙にかまわずに、美里は夏の北海道の話を続けていった。

正直に言ってしまえば、理沙にとって、夏の話はどうでも良いことだった。夏の北海道とは無縁に思えたし、第一自分は今、冬の北海道に夢中になっている。平日の閑散（かんさん）としてほとんど誰もお客がいないような建物のインフォメーションカウンターの中で、二人きり無言でいるよりはずっと楽しいと思って聞いていただけだ。美里の魅力的な口からぽんぽんと出てくる、歯切れのいい落ち着いた声を、まるでテンポのいい音楽のように受け止めていることも好きだった。

そのうち、美里の口から聞き慣れない言葉が飛び出てきた。『キャンパー』と言ったと思う。訊き返すと、それはテントを持って北海道を回っている人間のことだと答えてきた。

大勢の大学生が夏休みの間、オートバイや自転車などでキャンプをしながら北海道を旅行しているという話はどこかで聞いたことがある。そのことかと尋ねると、美里はちょっと不思議な笑顔を見せて横に首を振った。そういう連中のことは『ツーリング・ライダー』だとか『サイクリングの学生』だとか呼んでいる。自分たちは単なる旅行者と、旅をする人間のことを分けている、と答えた。

「旅行と旅？」

同じことではないか。ちょいと雰囲気を変えただけの言葉で、その内容に変わりなどありはしない。理沙は首をかしげた。

そんな理沙の疑問は承知しているという微笑みを浮かべて、美里はくるりと椅子を回して、理沙に正面を向けてきた。

「北海道を回っている人間は、大学生だけじゃなくてね、一般のサラリーマンも、何か商売をしている人たちも、――つまり、社会人もいるのよ」

「まあ、そうでしょうね」

理沙の相槌に美里はうなずき、まるで何かの秘密を打ち明かすかのような雰囲気で体を近づけ、わずかに声を潜めた。

「で、意外と多いのがね、『現在無職』の人。会社を辞めてきた人たちとか、期間工とか、それ

に地元なんかに決まったバイトは持ってるけど、夏の間だけは働かない人たちとかね。そういう人たちは夏の北海道のために生きている人間なの。分かる？　二カ月、三カ月続けて北海道にいたいがために、普通の定職につけない人間」

美里の目が怪しくきらめいて見えた。理沙は背もたれの無い椅子の上で少しのけ反って美里との距離を元に戻し、鸚鵡（おうむ）返しに言葉を出した。

「二カ月、三カ月続けて北海道…」

瞬（まばた）きをして相手を見つめる。美里はすました感じで答えた。

「うん。そう。もっと長い人もたくさんいるよ」

いたずらっぽい美里の目を見つめたまま、理沙はまた首をかしげた。

「理解できない？」

「その長い間、どうしてるの？」

なんとなく馬鹿みたいな質問をした。

「旅してる。あちこち行ったり、気に入ったキャンプ場に滞在したり、山に登ったり、温泉に入ったり、お祭りに出たり、観光したり、走ったり、のんびりしたり」

「走ったりって？」

「バイク。キャンパーはライダーが多いし、北海道はバイクで回るのが一番いいと思うし」

「ミリもオートバイに乗ってるってこと？」

当たり前と言うように美里がうなずき、理沙を驚かせた。美里にはオートバイに乗るなんて雰

囲気は全然無い。外見もおとなしいし、性格も落ち着いている。跳ね返ったところなどありはしない。バイクに乗るよりも、図書館に通うのが趣味だと言われたほうが、ずっと納得できる感じなのだ。

「それで、ミリもその、キャンパー、なわけ？」

「だから今みたいな話をしている訳でしょ？」

美里はからかう調子で言ってきたが、理沙はまた質問するしかなかった。

「二、三カ月もずっと北海道にいるの？」

「私は一年中いるよ」

美里がまた半分からかう口調で答える。

「じゃ、なくって、ずっと、くるくると移動してるの？　夏の間？」

「もっとかな。春から秋まで、私はほとんどキャンパー。まあ途中で短期のバイトやったりとかもするけどさ。好きなところでテント張って、好きなように毎日遊んでる」

理沙は溜め息をついた。そんな生活はまるで童話の世界だと思った。夏の間中、楽器を弾いて歌を歌い、働くことをしないキリギリス。好きなことをして暮らし、冬には死んでしまうキリギリスの話。もちろんすぐそのあとには、もっと現実的なことが気になり出した。

「でも、ずっとテント？」

「みんな訊くけど、べつに大変なことじゃないよ。慣れたら全然平気。ここの寮よりも安眠できるくらい」

「食事は？」
「自炊」
「それでもお金が掛かるでしょ」
「街で普通に暮らしてるより、全然」
美里は全ての質問に平然と答えてくる。自分のやっていることは全くなんでもない普通のことなのだと言っているみたいだ。理沙はもう一度溜め息をついた。
「なんだか、ロビンソン・クルーソーみたいな生活ね」
理沙の言葉に、美里は弾かれたように笑った。
「全然違う！　理沙ってけっこう古い？　だいたい北海道は無人島なんかじゃないでしょ。理沙が想像するみたいな不便な生活でもないし、冒険みたいな生き方でもないのよ」
言ったあとも美里は笑っている。理沙は少し照れながら言い直した。
「じゃあ、ジプシーとかヒッピーみたい」
「それも違うけど、まあ、ロビンソン・クルーソーよりはまともかな」
また笑われ、理沙はちょっとやけになって言ってみた。
「じゃあ、『アリとキリギリス』のキリギリス」
「うん。それかな。それが一番近いかもね」
意外にも真面目な顔で美里はうなずき、理沙の意表を衝いた。けれどやっぱりそのあとで美里は大笑いした。

その美里の声が今、スピーカーを通して聞こえてくる。ロープの張ってあるゲレンデの中には入らないようにと注意しているのである。

一瞬、理沙は自分のことかなと思った。裸木(はだかぎ)の林の斜面に入るときに、ロープを潜(くぐ)っている。でもそれからずいぶん時間が経ってからだし、ロープを越えてまだ閉鎖中のこのゲレンデの中に入ってくる人間など大勢いる。通常の圧雪されたゲレンデに飽きて、ちょいと目新しいスリルを味わいたいとか、より自然な雰囲気を味わいたいという連中がいても、少しも不思議ではない。

理沙は林の斜面に顔を向け、誰か滑っている人間がいないかと捜してみた。

いた。深緑色のウェアを着たスキーヤーが、木々の合間を滑り降りてきている。かなりの速さだ。遠くなので顔など細かくは見えないが、体格や雰囲気から見てたぶん男。ほかにも五人ほどのスキーヤーの姿が同じ斜面に見えたが、理沙はその深緑色の男に注目した。

男の滑りは少々乱暴だった。基本を無視しているか、基本を教わっていないかのどちらかで、その強引な滑り方にはちょっとどきどきさせられた。今にも木にぶつかるか、転んでしまいそうである。それなのに男は絶妙なバランスを保ったまま、素晴らしい勢いで木々の合間を縫っている。天性の運動神経の良さだけで、あのスピードの中で体勢を保っているのだとしたら、それはそれで大したものだ。

《上手(うま)いのか下手なのか、分からない滑り方ね》

目で男を追いながら、理沙は見物を楽しんだ。

と、深い雪だまりに突っ込んだのか、男が転んで、雪煙が上がったのが見えた。

《あーあ。やっちゃってる》

派手な転び方だったので、理沙は笑ってしまった。心配などしない。自分もたまにだが、あれくらいの転び方はする。

理沙は目の上に掌(てのひら)をかざして、男が起き上がる様子を見守った。男は体についた雪を払ってから、外れた片側のスキー板を拾い上げた。それを雪面に置いてブーツにロックすると、男はストックを持った両手を上げて、大きく頭上で交差させるようにして振り始めた。

それが自分に向けて振られているのだと確信するのに、しばらくの間が必要だった。理沙が半分納得いかないままに手を振り返すのを見て、男はやっとまた滑り出した。

《誰だろう》

心当たりが無い。自分に手を振ってくる可能性のある男と言えば、せいぜい美里の彼氏くらいだが、あんな滑り方ではない。それとも私を、誰かと勘違いしているのかしら？

けれどなんとなく、自分は男のことを、どこかで見たことがある気がしてきた。理沙はその場に立ったまま、男がやってくるのを待つことにした。

男が斜面を下だり終わり、高原状になった平らな雪原のところまで来ると、やっと顔が少し分かるようになってきた。髪が短めに刈られているのははっきりと分かる。そして理沙には、それが誰だか突然思い出せた。

《ミリの友達だ》

ここでアルバイトをしている何人かのキャンパーの一人で、名前は確か、ケイタロウとか言っ

たはずだ。ちょっと変な名前だから憶えている。二度ほど、インフォメーションのカウンター越しに短い会話を交わしたことがある。そのとき深緑色のマウンテンパーカを着ていた記憶があるから、間違いない。

《ちゃんと私のことだって分かって、手を振っていたのよね？》

べつにあんなに手を大きく振られるほどの仲ではないと思う。寮での食事を一緒にしたことがあるわけでもないし、一緒に滑ったりとか、一緒にどこかに出掛けたこともない。二百人もいるバイトの中の一人というだけのことだ。

《来る前に、どこかに逃げちゃおかな》

相手が誰だか分かってしまえば、待っているのも馬鹿らしくなってきた。ここで立ち止まられて話し掛けられるのは面倒くさい気がするし、初対面に近いような男と話をするのは楽しいこととは思えない。

理沙は周囲を見回した。メインのゲレンデとの間の谷に下りていくか、この高原状の平らな雪原を進むかだ。ただどちらにせよ相手には、不自然な行動だと思われるに違いない。誰だか分かったところで逃げていったと思われるだろうし、ひょっとして追い掛けられたら、かえって鬱陶(うっとう)しいかもしれない。

迷っているうちに、相手はもう近くまで来てしまっていた。いまさら動くのはもう遅い。関わらずに通り過ぎてくれることを期待して、山に背を向けて倒木の上に腰を下ろした。

微(かす)かな滑走音が聞こえて近づいてくる。それが真横に来たとき、理沙はついちらりと目を向け

てしまった。その目がまともに相手の目と合った。
圭太郎(けいたろう)はにこりと笑った。スキー板を斜めにスライドさせて止まると、そのままの笑顔で理沙に近づいてきた。
理沙は無表情で相手を見つめ、どう挨拶をしたものかと考えた。答が出ないままに口を開こうとしたちょうどその瞬間、もう一度スピーカーから美里の声が聞こえてきた。ロープの張ってあるゲレンデはまだ開放されていないので、立ち入らないようお願いしますと言っている。
二人とも視線を空に向けて、そのアナウンスに耳を傾けた。それからまた視線を合わせて、お互いになんとなく間の悪いような表情を浮かべた。
「ここは立入禁止だよ」
いたずらっぽい表情に変わって言って、圭太郎が笑う。
「知ってるわよ」
理沙はそっけなく答えた。それでも圭太郎は笑顔を浮かべたままだ。
「知ってて入ってるなんて、悪い人だね」
「自分だって、知ってて入ってるんでしょ？」
「もちろん」
悪びれない顔をして圭太郎が答える。理沙はあきれて、相手を斜めに睨(にら)んでみせた。
圭太郎がびっくりした顔をする。
「君って、そうすると猫にそっくりだな」

言ったあと、圭太郎はまるで無邪気な子供のような表情で笑った。
その言葉とその表情で、不思議にも、理沙の顔にも笑顔が浮かんだ。そう、自分の顔に作為の無い自然な笑みが生まれたことに、理沙は少々の驚きを持って気づいたのだ。
「あなたは猿にそっくりね」
ほとんど反射的に、考えずに言い返した。
圭太郎は目を丸くしたあと、片手を顎の下に、片手を頭の天辺に持っていった。数秒あって分かったのだが、どうやら猿のまねをしているらしい。顔が真剣な表情をしていることが、かえっておかしかった。
つい理沙は声を出して笑ってしまった。
《変な男》
思いながら、この出会いはそれほど悪いものじゃないと感じた。
「ずいぶん派手に転んでたわよね」
思い出して、意地悪な口調で言ってみる。ただしちょっと笑顔を残したままで。
「君に見惚れてて転んだんだよ」
すました感じで圭太郎が答える。
「嘘。あんなところから、ちゃんと見えるわけないじゃない」
理沙が言い返すと、圭太郎はやっと照れた顔を見せた。
「でも、私だって分かって手を振ったの？」

「その腰までのまっすぐな髪と、黄色いウェアで分かったからね」
「ふーん？　いつ見たのよ？　私がスキーウェアを着てるときなんかに、会ったことないと思うけど」
「休みの度に、俺のリフトに乗るだろ？」
それまで気にしなかったことだが、今の言葉で、圭太郎の部署がリフトだということが分かった。
「手を振り返してくれたのはうれしかったよ」
満足そうな表情を圭太郎が見せたので、理沙は少し途惑(とまど)った。
「べつに。誰だか分かって振り返したんじゃないもん」
つっけんどんに言った。変な勘違いをされては困る。
圭太郎は小首をかしげると、なぜだか一段とにっこりとして理沙を見つめてきた。
「ビール飲む？」
「は？」
いきなりの脈絡(みゃくらく)の無い質問に、逆に理沙のほうが間抜けな感じで尋ねてしまった。
「どこで？」
「ここで」
「二人で？」
なんだか自分が馬鹿になった気がした。ろくな質問をしていない。

「君と俺しかいないよ」
落ち着いた声で言われて、理沙はちょっと頭に来た。
「でもどこにビールがあるって言うの？」
やっとそれまでで一番まともなことを尋ねた。圭太郎の上着のポケットも、迷彩柄のズボンのポケットも、お腹も膨らんだりしていない。もちろんザックなんかも背負っていない。理沙は圭太郎の顔に視線を戻し、意識して憎らしい顔を作った。
圭太郎はそんな理沙のことを、いたずら猫でも見ているような目で見て笑うと、また変なことを言った。
「君のお尻の下さ」
理沙は今度こそ本気で相手のことを睨んでみせた。からかっていると思ったのだ。だが圭太郎は涼しい顔で、理沙の座っている倒木の下をストックで示した。
「よく冷えてるはずだよ。昨日の夕方からだから」
半信半疑の気持ちで、理沙は膨れて圭太郎を見つめて座ったまま、自分のストックを使って雪を突いた。適当にざくざくやり始めると、圭太郎があわてた口調で止めた。
「あっ、待って。そんな勢いで刺したら、缶に穴が開いちゃうよ」
その言葉で、どうやら本当にビールが埋めてあるのだと分かった。理沙は少し慎重に雪の中をストックで探った。
「もうちょっと左側だったかな」

言われたように先を動かしていくと、コン、と固いものに当たった感触がした。
「あった！」
うれしそうな声で叫んでしまってから、はっとして、理沙は思い出したように圭太郎を睨んだ。でもうまくいかなくて、照れたみたいな表情に変わってしまった。
圭太郎はスキー板を外すと、理沙のすぐ近くまで来て、理沙のストックの先が示した雪の中から、二本の缶ビールを拾い上げた。
「冷えすぎちゃったかな？」
いたずらっぽく笑いながら、圭太郎が一本を手渡してくる。
「凍ってない？」
受け取って、理沙は缶を軽く振って笑った。
「さあ、乾杯しよう」
「何に乾杯するの？」
「猫と猿が仲良くなったことにさ」
プルタブを引くと、プシュッと音がして、少しの泡が飛んだ。圭太郎が缶を突き出してきたから、理沙は自分の缶をぶつけて尋ねた。
「仲良しなの？　私たち」
「今日からね」
圭太郎がビールを口に持っていったので、理沙も口をつけた。凍ってシャーベット状になった

ビールが、ざらざらと口の中に入ってくる。
「私、凍ったビールって初めてだけど、おいしい」
口の中の苦い氷が溶けるのを味わって、理沙は圭太郎に言って微笑んだ。
「うん。君ってやっぱり猫に似てるよな。表情がくるくると変わるところも」
圭太郎は何やらとても満足そうに理沙を見つめてから、二口目の凍ったビールをたっぷりと口に流し込んだ。喉を鳴らしてほとんど氷のままで飲み込むと、もう一度理沙に視線を向けて、困ったような笑顔を見せた。
「うーん、俺はまずいと思うな。ひどい味だよ」
おいしい、と言った理沙を疑う目で見てくる。理沙は首をかしげ、すまして相手を見つめ返した。
しかしこうして近くでちゃんと見てみると、圭太郎はなかなかいい顔をしていることに気づいた。優しげな表情なのに、男らしい張りのある顔。繊細さと無骨さが同居しているような矛盾がありながら、均整の取れた顔立ち。なんだか猿と言ったことが、悪い気がしてきた。
「だけど、どうしてこんな場所に、ビールを埋めておいたの？」
いまさら謝るのも変だし、相手も悪い気を起こしたわけではなさそうだから、猿と言ったことは置いておいて、理沙は一番の疑問を尋ねてみた。
「だって、君の好きな場所だろ？」
自信を持った声で圭太郎が言う。答えになっていない気がしたが、理沙はそれ以上訊くのをや

めた。それよりも、圭太郎の後ろに広がる風景が、いつの間にか一変していることに気づいて、思わず目を見張った。

「ほら、見て！」

理沙は立ち上がり、圭太郎も振り向いた。

遠方の白くぼやけたようなガスが消えて、眩しい太陽の光の中に、雪を被って真っ白な羊蹄山（ようていざん）が、大きく、ゆったりとその姿を輝かせていた。